〔2011(平成 23 年度)　第 11 回日本語教育学会研究集会（京都・京都外国語大学）発表要旨〕

# 教室活動と Can do リスト

―体験型短期研修の場合－

岩澤和宏

(2012.3.10)

国際交流基金関西国際センターでは、海外の大学等で日本語を学んでいる学習者を対象に 4 週間から 6 週間の体験型短期研修を実施している。この研修では、自国の教育機関で既に学んだことを実際に日本で使ってみることを重視し、そのための実際的な活動を行っている。「文法」「読解」「漢字」といった日本語学習の「基礎体力」に当たる部分の授業は行われていない。知識の量や正確さだけよりも、日本語を使って何ができるかという部分により大きく焦点を当てている。

国際交流基金ではヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)を参考にしつつ、JF 日本語教育スタンダードの開発を進めている。CEFR においても JF 日本語教育スタンダードにおいても能力記述文は「～ができる」という形で記述されている。「～ができる」という視点は近年の言語教育で重視される傾向にある。

「～ができる」を記した Can do リストは言語生活の様々な場面や状況の言語能力を記述しようとしたものだが、実際にそれらすべてをチェックすることは容易ではなく、またその必要もない。教育現場ではそれぞれの教室活動に合せて Can do リストをカスタマイズしていくことが必要であり、またそれが現実的な対応であろうと思われる。

本発表では、関西国際センターで行われた教室活動を紹介すると共に、実際に使われた Can do リストを検証した。学習者が自律的に学習を進めることが重要だという視点から、学習者の意識化や発見を促す工夫についても考察を加えた。また、自己評価が研修修了後の継続学習に繋がる可能性についても考察した。

研修内容が固定化したものではないため、Can do リストは完成品ではない。教室活動に合わせて、また研修参加者に合わせてさらに調整していく必要がある。Can do リストを自律学習や継続学習に具体的にどのように結び付けていくかという点に関してはまだ多くの課題が残されている。

（国際交流基金関西国際センター）